
七時四十五分

前川せりな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七時四十五分

【Nコード】

N5084H

【作者名】

前川せりな

【あらすじ】

あたしにとって、毎朝七時四十五分は一番幸せな時間。

——七時四十五分。

一日のうち一番楽しみで幸せな時間。

【七時四十五分】

こんな田舎町なので電車はたったの二両しかない。

あたしが通う高校は隣町にある全校生二百人ちよっとの小さな学校。地元の駅から二駅行っただころに遠慮気味に建っている。

高校は、中学の頃憧れていたような楽しいところではなく、毎日勉強勉強でとてもではないが楽しいなんて言えない。

そんな高校への通学時間はあたしにとって一日で一番幸せな時間だ。理由は単純。とある人が同じ電車なのだ。

そのとある人は、知り合いでもなければ、話したこともなく、名前も知らない。挙げ句の果てにどこの高校の生徒なのかもよくわからない。

そんな彼に惹かれているあたしは変なのかもしれない。誰にもそのことは言っていないし、言うつもりもない。

笑われたって構わない。あたしにとって彼は、唯一の楽しみなのだから。

彼は顔がいいわけではないし、かと言って性格がいいのかと聞かれても知らない。何が一体幸せの理由なのかと聞かれたら、きつとこう答えるだろう。

——行動が面白い。

ある日は音楽を聴きながら指を使って遊んでいたりと、ある日は童謡『かえるのうた』を歌っていたり。またある日は朝ご飯であろう菓子パンをむしゃむしゃとまるでリスやハムスターなどの小動物を思わせるように食べていたり。

とにかく毎日見てて飽きない。

昨日は膝を抱えて眠っていた。ちゃんと靴は脱いでた。隣のおじさんの顔がまた可笑しくて可笑しくて。：物凄く嫌そうな顔が。

今日はひたすら財布を探っていた。何か仕出かしそうだな、とかぼんやり考えてたら案の定と言うか何と言うか：——期待を裏切らなかった。彼は盛大に財布の中身を撒き散らした。

斜め前側に座っていたあたしの足元にまで小銭が転がってきた。あたしは思わずコツンとローファーに当たった十円玉を拾ってしまった。

「あの：」

「：はい？」

あたしが遠慮がちに声をかけてみると彼は真っ直ぐにあたしを見てきた。

（：うわ、意外と綺麗な顔してるかも）

今まではつきりと彼の顔を見たことがないあたしはそんなことを考えながら彼の顔をまじまじと見つめていた。すると、彼は少し困ったような顔をして

「何か：？」と尋ねてきた。

あたしは慌てて拾った十円玉を差し出した。

「あ：。ありがとうございます」

へらっと笑う彼。

——：なんか可愛いかも。

不意打ちな彼の笑顔にあたしのハートはノックアウト！——なんてね。そんな柄でもないことを考えて、一人で苦笑。

「あの、すみません」

「はい？」

今度はさっきと逆で彼から声がかかる。

「あなた…、毎日同じ電車の須賀高校二年四組、桃原くるみさんじゃないですか？」

「……え？」

須賀高校二年四組桃原くるみ。

一言一句違わず、あたしのことだ。

「……………」

「……………」

暫く、沈黙が降りた。

「…あのー、どうしてあたしのことを……」

そんなに知っているんですか、と聞こうと思ったくるみだったが、あたしが言い終わる前に彼が口を開いた。

「桃原さんが好きだからです」

「……は？」

名前も知らない人から告白されて、どう反応しろと言うんだ。いかにも『何言ってるんですか』という顔をしてやると彼はさっきより声を大きくした。

「だーかーらー、俺が桃原さんを好きだからー」

「ちょちょちょっ！？」 ストップ、ストップ！！」

忘れてたけどここ電車の中だよ。しかも何か乗ってる全員があたしたちのことガン見してんじゃない？！

慌てて彼の口を塞ぎ、出来るだけ小さな声で話し掛ける。

「あのさ、あんた何言ってるかわかってんの？」

「わかってる」

「いやいや、おかしいでしょ、それ。絶対わかってないよね？」

「だから、わかってるって」

「わかってたら、そんな脈絡もなく言えるわけじゃないじゃない」

「桃原さん、いつも俺のこと見てたでしょ？」

「なっ、なんで今そんな話になるのよっ!」

ずささと後退るあたし。にこやかにあたしを追う彼。

「顔真っ赤だよ? 熱あるんじゃない?」

「誰のせいだと思って……」

「俺のせいでしょ?」

「あ、あのね……」

何なんだ、コイツ。

確かに毎朝見てたよ。あんたのせいだよ。熱だってあるのかもしれない。何かドキドキするんだよ。——名前も知らない男なんかに、ね。

「ねえねえ」

「……何?」

「桃原さんは俺のことどう思う?」

にこにこしながら聞いてくる。わざとだ。絶対、わざと聞いてるんだ。

「そういうこと聞く前に、もっと大切なこと、あるんじゃないの?」

「え? 何が?」

「名前」

「ん?」

彼は首を傾げて、眉を潜める。

「名前、教えてよ」

「ああ、そういえば肝心な言い忘れてた」

そうだった、と手を打つ彼。

「……ありえない」

「はは、ごめんごめん」

彼はさらりと謝り、真っ直ぐにあたしを見て言った。

「俺の名前は、酒井浚。須賀高校の近くの白河高校二年生。よろしく」

＊
＊
＊

あれから二ヶ月が経った。

七時四十五分――。

それは今も変わらず、幸せな時間。

e
n
d
＊

（後書き）

初めての投稿。この作品は病院の待ち時間の間に半分以上を書いた、なんかよくわからない作品です。作者自信、矛盾してるなーと思うところが多々あります。これから色々な物語を書けたらいいなと思います。ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5084h/>

七時四十五分

2011年1月23日02時42分発行